

第三十二回 インプラントの欠点・後遺症

骨の中に埋め込んだ人工歯であるインプラントの後遺症を申し上げますと、患者は第一番目に訴えるのは、埋め込んだ側の首・肩が凝る、又は左右共に埋め込んだ場合、左右共に首・肩が凝ると訴えるものです(埋め込んだインプラントがぐらぐらと動いているのではなく、しっかりとくっついてある場合)。

骨の外側には膜があります。内側から外側に内膜、くも膜、硬膜となっております。

インプラントが対合歯とあったり、食べ物があたりますと硬膜に刺激が加わり硬膜の緊張をおこします。

実験的に一旦硬膜の緊張をとり、すぐに歯全体に少し厚みのあるガーゼのようなものを咬ませますと硬膜の緊張の反応が出ないですが、ガーゼをとり上下の歯をカチカチと咬ませますとすぐに元の硬膜の緊張を起こします。又は骨の中に埋まっているインプラントをそのままにしてインプラントの上に乗せてある歯だけをとり除いて「入れ歯」にしますと硬膜の緊張がとれます。

それでは硬膜の緊張は体にこのような変化を起こすのかと申しますと、頭蓋骨・手・足・背骨を始め、体全体の関節に異常を起こします。つまり、体全体がかたくなるということです。

最初に自覚症状を起こすのは体全体の不調(眠りが浅い、低温の異常、ダルイ……)ですが頭・首の境目のあたりの関節と足のアキレス腱の内側の関節に出始め、さらに月日が経つに従って上(頭)と下(足)から体の中心に向かって自覚症状が増してくるものです。

(但し、スポーツ選手のようなタイプは筋肉が発達している為に病気に対しては鈍く、年を増すに従って筋肉が衰えて気が付いた時には病気が相当進行していると言われるものです。)

それだけでなく、脳脊髄液の流れも減少します。放っておけば求心性に変わり、体全体の異状特に中枢神経系に脳脊髄液の供給が妨げられるといわれています。

死の直前の人は脳とおしりの仙骨の骨の間に1分間に4、5回往復し、健康な人は1分間に11回とも言われます。抗癌剤を一度打つと内臓がダメージを受けている為に期間をあけて打つものです。

又硬膜の緊張(インプラントだけでなく、歯の矯正治療、電磁波、その他の一般的な病気)を起こしていますと首の骨は生理的な前湾曲でなくて「直」又は逆カーブ(後湾曲)になっています。

この様な人は毒物、劇物、体に合わない薬、メガネ(レンズ)、その他薬は体が拒否反応を起こさないものです。つまり、硬膜の緊張は神経伝達不良ともいわれ病気の中の病気とも言われています。

健康な人は毒物、劇物、体に合わない薬は手で触るだけで頭蓋骨は体の胴体部の肩と腰が捻れ、左右の足の長さが瞬時に変わるものです。

硬膜緊張のタイプは全く逆で無反応です。

首の骨の「直」「逆カーブ」は不定愁訴のかたまりと言われてはいますが、「直」と「逆カーブ」との違いは冷え性は冷え性ですが逆カーブの方は体の部分的に非常に熱くなったりそれ以外は冷たくな

っていることです。

これを治すには歯の咬み合せで治すものですが、インプラントの場合は骨とくっついている為、歯根膜という「クッション作用」がないが故に本来の歯と同じ高さにすると高く感じるものですので、低く作るものです。そうすると今度は体のバランスが崩れるだけでなく硬膜の緊張ももっている為に非常に難しい問題です(硬膜緊張タイプは力を抜いて10秒くらい真っ直ぐに立ちますと前後によく揺れてくるものです。インプラントのその歯だけにティッシュペーパーのようなものを咬ませますと歯の硬膜に刺激が加わり周期的に前後にフラフラと4~5cm位動きます。正常は前後1cmです。その後、そこに又顎関節症あればプラス横ズレを起こすものです)。顎関節症よりさらに悪くなると座骨神経痛、腰痛ヘルニアに進みます。

又、難聴の原因の1つは歯の咬み合せの低い側に起こり、そしてその反対側の足の太ももの筋肉に異常を起こし階段を昇るのが苦手になるものです。左右の奥歯が低ければ左右の耳が聞こえづらく左右の足の太ももに異常を起こすものです。